

徒花にあらず

インターネットへの違法アップロード、 ネットオークションフリマアプリなどへの出品等、 不特定多数に向けた全ての転載・転売行為を禁じます。発見した場合は、1文字につき10円もしくは1ページにつき5,000円の掲載料(使用料)をいただきます。

また本作品は誤字脱字チェック・作品構成補助として
note AIアシスタントを使用しています。

<登場人物> ()内は年齢

メル・ヴェベール (20) / オメガ

氷と雪に閉ざされたニクス帝国の呪術士。
占術と夭折したアルファの供養を行っていた。
死者を弔う強靱な精神力と、生命力を買われて
ボルガ王国の皇太子の配偶者候補になった。

エイダン (25) / アルファ・攻め

ボルガ王国の皇太子。周囲のオメガを自らの生命力で
弱らせてしまう特異体質のアルファ。これまでに見合い
をした数々のオメガを弱らせてしまい、オメガと触れ合
うことを恐れている。

第一話	南薫 なんくん	……5
第二話	異邦	……21
第三話	雪消 ゆきげ	……39
第四話	薄明	……63
第五話	否諾 いなさ	……103
第六話		……
エピソード		……
後日談		……

第一話

南薰

一、

きらびやかな金の装飾が施された宮殿、白亜の壁、天井からぶら下がるガラスの照明。そのすべてがメルにとつて目新しかった。南国というのはこうも豊かなものなのか、とうらやむ気持ちもあったが、すぐに仕方のないことだと割り切ってしまった。そう思わないとやっていられないほど、祖国との差は明白だった。メルは自らの好奇心をぐつと押さえ、静かに宮殿を歩く。

(……歩きづらい)

裸足で歩く習慣のない国からやってきたため、靴を履かないまま歩くことに慣れない。思った以上に滑らないことに苦戦していると、先頭をいく侍女のサンドラが振り返った。そばかすが散った愛嬌のある顔が心配そうに眉を下げていた。

「ご気分がすぐれませんか？」

「いや、そういうわけではなく……裸足では歩きづらいな、と」

素直に告げたメルに、サンドラはああ、と破顔した。真顔でいると少年に見まがう端正な容姿だが、笑う顔は少女のものだった。

「もう少しゆっくり歩きましょうね」

そう言つて少し歩く速度を下げたサンドラは優しい子どもなのだとメルは思った。

(あ……)

宮殿の窓からひゆう、と風が入り、メル^{メル}の耳飾りを揺らした。メル^{メル}の祖国とは異なつて、温かくも湿つた風だつた。

○

メルにその知らせがやつてきたのは、ある日の昼過ぎのことだつた。

「……縁談？ 俺に？」

雪に閉ざされ、呪術と占術を主産業とするニクス帝国において、婚姻は通常十代のうちに行われる。

しかし、メルは現在二十歳であり、これ以降、この国において婚姻は見込めないのだらうな、と諦観していた。そもそもメル自身に結婚願望はあまりなかったが、一年の半分を雪で覆われる国で独り身のオメガ^{オメガ}が生きるのはあまりにも厳しかった。

この世界において、ヒトは生物学上の男女以外にアルファ、ベータ、オメガの三種類の区別をされる。人口の七割を占めるのは一般人とされるベータだ。残り三割を二分するのがアルファとオメガである。オメガの一番の特徴はアルファとであれば生物学上の性別に関わらず、生殖が可能であることだ。オメガには『ヒート』と呼ばれる発情期が数か月に一度の割合で訪れる。ヒートではアルファに作用するフェロモンが放たれ、身体は本能的に生殖の準備に入る。

そのため、むやみにフェロモンを放たないよう、オメガは十代での婚姻が推奨されていた。初めてヒートを迎える前後でアルファと婚姻関係——番となるのである。

「そうだ。今までこの仕事をさせてしまつてすまなかつた。わしの力不足だ」

メルは養父であり仕事の師でもあるノエはメルに頭を下げた。呪術と占術の国であるニクス帝国において、彼は非常に地位の高い人間であり、メルは慌てて頭を上げるように言う。

「師父……謝罪の必要はありません。俺も別に望みませんでしたし、その、」

ヒートを迎える時期も遅く、呪術士として働くメルを番にと望む声は皆無である。呪術士として優秀であることと、世間の理解を得られることは別であり、死者の弔いを行うメルへ向けられる視線は冷やかかなものだった。

オメガの婚姻に責任を持つのは親であるが、扱いづらいオメガであるメルに対して師父は十分すぎるほど、愛情を注いでくれたと思つてゐる。

「それでもやはりわしの力不足が招いてしまったことだよ。これを読んでごらん」

師父が手渡した書状は、通常ニクス帝国で使われているものとは異なつた。厚みがあり、ざらりとした感触の紙だった。書状に目を通しながら、だんだん自らの眉間にしわが寄つてゐることをメルは感じた。

「師父、これは……本気で？ 本物ですか？」

「間違いない。ボルガ王国の使者が秘密裏に持つてきたものだ。そこを見なさい」

書状の右下を見ると、ボルガ王国の王家の紋章である扇と芍薬の花が入っていた。

ボルガ王国は、ニクス帝国から船で三日移動し、そこから陸路をもう半日征くことで着く南方の国だった。ニクス帝国との国交は、師父を通して多少あれど、メル自身にとってはほとんど縁もゆかりもない土地だ。

まして、かの土地の王族と交流などはまったくないが――。

「女王自らが皇太子の番の候補として、オメガの俺を乞うている、ということですね」
 メルの確認に師父は重々しく頷いた。そして、メルを真つ直ぐに見つめて言う。

「この国でのお前は、知られ過ぎてしまった。誰もお前のことを知らぬ土地で、お前自身をの人生を歩むといい」

「……はい」

師父の言葉は優しく、十分にメルを想つてのものだった。ただ、どうしても祖国から厄介払いされるのではないか、という心の奥底の気持ちはぬぐえなかった。

そんな突然の求婚の書状を得てから数日後、メルは秘密裏に船でボルガ王国に出発した。これではまるで亡命のようだと、思いながら、メルは持ち物を簡単にまとめ、船に乗りこむ。王族に嫁ぐにあたり、宝飾品の一つも持たないのは失礼ではなからうかと思つたが、先方の『すべての用意はこちらでいたします』という言葉に甘えることになった。万が一婚礼の用意はそちらで、と言われても、残念ながら先立つものがない。

メルの生みの親はメルが生まれてすぐに他界しており、兄弟もいない。見送りに来たのは師父だけだった。

「健やかにな」

「はい、師父もどうかお元気で」

師父に抱きしめられて、メルも彼を抱きしめ返す。昔よりも痩せて、手のひらに背骨が当たる感覚に、鼻の奥がツン、と痛んだが、ぎゅつと目をつぶって堪える。

「あとはこれを。お前の生みの母が持っていたものだ」

師父が手渡したのは、宝飾品の入った箱だった。中には、美しく磨かれた月長石がついた耳飾りが入っていた。

「きつとお前を助けてくれるはずだ」

「ありがとうございます」

手を伸ばした師父に、メルは少し頭を下げた。ぽんぽん、と優しく二度頭を叩いた師父は「行きなさい」と穏やかにメルに促した。

「師父、行って参ります」

そう言って頭を下げたメルを、師父は穏やかに笑って見送った。

そんなやり取りから三日半経ち、やっとメルはボルガ王国の宮殿に足を踏み入れた。船を降りる前に、侍女のサンドラが身なりを整えてくれたが、ひどく薄着であり、本当にこれでよいのかとメルは首を傾げた。

（——まるで下着だけのようだな）

思うだけにとどめておく。せっかく用意された衣類にケチをつけて海に放り出されてはどうしようもない。身に着けた衣類は綿できており、軽く、風通しがよかった。毛皮か羊毛が当たり前のニクス帝国と比べて、着るものが簡素かつ少ない理由は、すぐに理解できた。

「……暑いな」

まばゆい光にメルはペイルブルーの目を細めた。暗い黒色の髪は逆に日光を吸収して、頭皮にじんわりと汗がにじんだ。

「ええ、湿度も気温もニクス帝国に比べて非常に高うございますので、慣れるまではわたくしと一緒にいらしてくださいね。ご気分が悪くなられましたら、すぐにお申し付けください。——絶対ですよ」

船の中からサンドラはメルに対して恭しく接した。メル自身、呪術士として他国の王族・皇族と接する機会があったが、自らがかきずかれる経験は少ない。なんとも言えない居心地の悪さを感じるが、サンドラから悪い気は感じられないため、ありがたく彼女の気遣いを受け取る。

宮殿の中を歩き、ようやくと奥の王座の間に着いた。重厚さを感じる白亜の扉の前で、サンドラはくるり、とメルを振り返った。

「失礼いたします」

そう言つてサンドラはメルの上に、色とりどりの宝石がついた金のチョーカーを付けた。

「これは？」

「ご容赦くださいませ。正式な婚姻の場まで貴方様を保護するものでございます」

アルファとオメガの婚姻は、アルファがオメガのうなじを噛むことによつて成立する。正式な婚姻の場までオメガのうなじは保護されることがボルガ王国の通例であった。

「そうか」

そういうものか、とメルは納得して顔を上げた。国が違えば文化も異なることは呪術士の仕事を通して知っていた。

「……ご不快に思われませんか？」

「それがこの国の文化だろう？ それに俺が口を出すことはない。そのうち理解しなければならぬものになるのだし」

最後の一言にサンドラはパツと顔を明るくし、メルに深々とお辞儀をした。

「ここから先、わたくしはお供できませんが、ここでお待ちしております。何かあれば、

すぐ駆けつけますので」

「ありがとう」

大いに矛盾する二言だったが、サンドラの気持ちをありがたく受け取り、メルは笑って礼を述べた。

足を踏み入れた王座の間は、これまで通ってきた廊下よりも一層絢爛なつくりになっていた。壁には歴代の王と女王の巨大な肖像画が飾られており、天井からはガラスではなく水晶と思われる装飾品が垂らされている。床に敷かれた毛足の短いラグはつくりこそ重厚だが、さらりとした感触で、足裏に柔らかく馴染んだ。

王座は床から数段高い場所に置かれており、メルはなるべく目を伏せたまま（ボルガ王国では初対面の王族を許可なく直視することはタブーなのだというのが、サンドラからの教えだった）王座の真下まで足を運ぶと、膝を折ってこうべを垂れた。

「ニクス帝国より参りました。メル・ヴェベールでございます」

「この度は、はるばるよく来てくれました。面を上げなさい」

ゆったりとした深い女声が響く。国を統べる王たる威厳に満ちた声だった。

ボルガ王国女王のシエンナ直々に旅をねぎらわれて、メルは恐縮したが、ゆつくりと顔を上げた。目の前の王座にはよく似た顔の男女が腰かけている。どちらも、燃えるようなバーミリオンの髪に、深い森のようなエメラルドグリーンの瞳がよく映えていた。

そのうち女王の方が、メル顔をみて目を輝かせた。

「そなたの師匠から話は聞いていましたが、話に聞くよりもずっとすてきではありませんか！」

先程までの荘厳な態度が嘘のように、王座から飛び降りんばかりの勢いで女王は喜ぶ。その様子にメルはホッと胸をなでおろして返答した。

「わたくしも、陛下にお目にかかることができて光栄です」

ノエがメルに見せた書状には確かに彼女のサインと王家の紋章が押されていたが、自ら望んだのか、誰かの提案あつてのことかまではわからなかった。しかし、彼女の様子を見る限り、彼女自身がメルを皇太子の配偶者にと確かに望んでくれたのだと推測できた。

問題は、その横で不機嫌そうに頬杖をついている皇太子の方である。

「ねえ、エイダン。すてきな子ではありませんか？ 母は大変気に入りましたよ」

皇太子——エイダンの方を女王は振り返る。皇太子は態度を変えることなく、口を開いた。

「母上、少し落ち着いてください。一国の女王ともあろう御方がそのようにはしゃがれては我が国の沽券にかかわります」

「お黙りなさい。馴染んだ祖国からわざわざこんな遠方まで呼びつけておいて、歓迎しない方が沽券にかかわるでしょう」

ぴしやりと皇太子に言い返して、女王はメルに「気になさらないでね」と声をかけた。そこでやっとメルにも、どうやらこの縁談は女王と師父の間で交わされたものであり、皇太子の意向はほぼ反映されていないものらしい、というのが飲みこめた。

（話が違います、師父！）

話の大きさに気を取られて確認をしなかったのはメル自身だが、責任転嫁せずにはいられない。だが、ここで皇太子の機嫌をさらに損ねてしまえば、メルがこの国にいる理由は木っ端微塵に碎かれてしまう。

どうしたものか、とメルが焦りながら考えを巡らせていると、パチリ、とエイダンと目が合った。メルが戸惑っているうちに、エイダンは王座から立ち上がり、メルの前に立った。大国の世継ぎとしての圧倒的なオーラと体躯を前に、メルは自分の身体がすぐむ感覚を味わった。じつとメルを見下ろしたまま、エイダンはにわかに口を開いた。

「年は」

「……二十でございます」

王族に嫁ぐにしては年齢が高いことを咎められるのかとメルは思わず首をすくめたが、エイダンはふん、と鼻を鳴らしただけだった。

「それにしても線が細い。余の伴侶たりえるのか疑問だな」

その時メルの脳内を天啓のようなひらめきが駆け抜けていった。どのようにしてこの国に残り、生き延びていくか。

「では、殿下ご自身がその目でお確かめください。期間はいくばく必要でしょうか」「なに？」

幸い女王はメルのことを気に入った、と口にした。メルがこの国に滞在すること自体は許可されるだろうと踏んでの賭けだった。

「わたくしが、貴方の伴侶にたる存在だとわたくし自身が証明する、と申し上げました。そのための期間を設けていただきたいのです」

メルは、ともすれば震える膝をぎゅつと手でつかむ。随分高い位置にあるエイダンの目を睨むかのようにじっと見つめていると、彼はため息をついた。

「……三月。それ以上はやらぬ」

「感謝いたします」

「感謝などせずともよい。……あとは母上にお任せします」

メルは深々と頭を下げた。エイダンはそのまま踵を返すと、足早に王座の間から出て行った。大きな扉が閉まる音を確認して、メルは無意識のうちに詰めていた息を吐き出した。

「大事ありませんか。お見苦しいところを見せてしまいましたね」

気づくと、目の前には女王の姿があった。メルは彼女の謝罪にゆるゆると首を横に振った。たった数分対峙していただけだったが、エイダンとの会話でメルはかなり消耗していた。

しかし、女王は感心したように言う。

「しかし、そなたは度胸があつて、非常に強い胆力の持ち主ですね。あれに意見できるものは宮殿にもなかなかおりませんよ。ますます気に入りました。わたくしとしては、もうこの時点でそなたをあれの伴侶に迎えたのですけれどもね」

統治者を諫められる優秀な伴侶は金を積んででも迎えるべきですからね、と褒められてメルは複雑な気持ちになった。通常であれば不敬であると叱られる場面である。

「それは、光栄です……が、この縁談の本当のところをわたくしにも教えていただけませんか。皇太子殿下があのような態度でいらつしやる理由が知りたいのです」

メルの言葉に女王は「そうですね」とつぶやいた。

「わたくしの我儘でそなたをこの国に招いた以上は、説明の責任がありますね。ただ、本日はそなたもこの国に着いたばかりで疲れているでしょう？ 明日以降ゆっくりお話しましょうね」

「はい」

女王はにこり、と微笑んで二回手を鳴らした。すると王座の間の扉が開いて、サンドラが素早くメルのそばにやってきた。彼女はこの部屋に入れないのではなく、許可なく入れないのだな、とぼんやり考える。

「サンドラ、しっかり世話するのですよ。手はず通りになさいね」

「はい、陛下！ 心得ております」

サンドラは失礼します、と言って恭しくメルの手を取ると、女王に深く一礼して王座の間からメルを連れ出した。

「殿下との初のお顔合わせはいかがでしたか。その、殿下は先に退室されてしまいましたか……」

再び廊下を歩きながらサンドラが恐る恐るメルに訊ねる。

「そうだな……殿下とちよつとした賭けのようなものをする事になった」

「賭け、でございますか」

「俺が殿下の配偶者にふさわしいかどうか、三月かけて証明できれば、この国に残る。できなければ……どうなるかはわからない」

メル of 言葉聞いて、サンドラは力強く自らの胸を叩いた。

「できますとも！ 不肖ながらわたくしが全力でお支えますので」

「ああ、ありがとう」

女王はまずメルに味方してくれると思われたが、四六時中そばにいるわけではない。侍女のサンドラが強力的であることはメルにとって非常に心強かった。

「ではまず、お部屋からご案内しますね。長旅でお疲れでしょうから、この国の疲労取りによく効く温泉で湯あみの準備をしておりますよ」

「それは、楽しみだ」

ニクス帝国では湯に浸かる習慣はなかった。一体どのようなものが準備されているのか、とメルは心を弾ませた。

「はあ……これが」

自室として宛がわれた部屋は広く、祖国の自室とは比べ物にならないかった。応接スペース、居住スペース、寝室、と用途ごとに部屋が分かれており、部屋、というよりも小さな家、と表現する方が正しいかもしれない。簡易的なキッチンも備え付けられており、サンドラが湯を沸かしてくれていた。

なにより、外気が入ってくる場所にある風呂場は磨き上げられた石でつくられており、湯船は大人が五人は入れそうな広さがあった。湯船の中にはたつぷりと湯がはられており、メルが身体を浸けると、ほのかに草のような爽やかな香りがした。こわばっていた身体がほぐれるような感覚に、メルは小さく息を吐き出した。

「はい。いかがでしょうか。あちらでは、湯あみの習慣はないと聞いていたので少しぬるめの温度にいたしました」

「ちようどいい。ありがとうサンドラ。……しかし、湯あみというのは気候がよければよいものだな」

ニクス帝国においては、一年のほとんどが氷と雪に閉ざされるため、湯あみをしようとすれども、すぐに湯は冷め、かえって風邪をひく原因になってしまう。

しかし、この地においては、汗を洗い流し、身体を清潔に保つために欠かせないものだという。メルと言葉にサンドラはにこり、と笑って言う。

「ゆつくりお寛ぎください。わたくしはあちらで床を整えてまいります」

「ああ」

サンドラはそう言って浴室を出て行った。生ぬるいと思っていた湿気を帯びた風が、今は心地よく頭上を吹き抜けていく。メルは天井を見上げながら、今日あったことを思い返す。思えば長い一日だった。

(……殿下はああ仰っていたが、どこか引っかかる)

メルを試すような発言も、メルを侮蔑したり、見下したりしてのことではなく、何かその後ろに隠された感情があるような気がしてならない。

(これは、元占術士としての勘だからあてにはならないが)

何はともあれ、明日以降再び女王と話をするまでは未確定のことばかりである。やれやれ、と小さく呟いて、メルは湯船の湯を手ですくってぱしゃり、と顔にかけた。